

Global Session(6月)のお知らせ

期日:2021年6月12日(土) 午前10:30~12:00

場所:ガレリア3階 会議室

ゲスト:村田英克さん

(JT 生命誌研究館・表現を通して生きものを考えるセクターチーフ)

コーディネーター:募集中

タイトル:謡曲『胡蝶』と生命誌研究館の「食草園」企画展

参加費:600円(子どもさんは無料)

要申し込み:10人まで(児嶋まで)

今日の亀岡は青空がいっぱい、雲を探しても見つかりません。亀岡は京都の桂坂を越えたら老いの坂という峠があり、その下り道で盆地が見渡せます。大阪市と同じサイズの大きな盆地なので、保津川を真ん中に広い平野が広がっています。京都駅からも30分以内で嵯峨野山陰線で着きます。

今回の村田英克さんの仕事場のある高槻市にも山を越える道がつながっていますので、村田さんは、車で来られます。(今回が3回目)

JT 生命誌研究館は訪問したことがありますか?誰でも参観できますよ。びっくりする生命の世界が広がっています。ガレリアは6月1日から貸し館が再開され、3階の会議室でお会いすることができます。アートで表現をしたいと思っていられる方はどうぞ。いろいろな表現の方法があることに驚かれると思います。村田さんの小鼓の演奏もありますよ。

謡曲『胡蝶』と生命誌研究館の「食草園」企画展

6/12(土)にお話をさせていただく生命誌研究館の村田英克です。3回目になります。前回に続き、「表現を通して生きものを考える」という私の仕事について、またこの仕事に携わり日々思う個人的な考えについて、ちょうど今、取り組んでいる話題から、お話をさせていただきたいと思います。

生命科学の知見を基本としながら、日常の「生きもの感覚」を重ねて、誰もが「生きているとはどういうことか?」を考える機会を提供することが、私たちの役割です。そのために様々な展示、映像、季刊誌、催しなどで発信しています。2020年4月に3代目館長に就任された、細胞生物学者で歌人の永田和宏館長は、研究館を「<問い>を発掘する場」と表現なさっておられます。

何か、新しいことがわかると、さらにわからないことが見えてくる。何かがわかったことで、わからないということがわかる。ということが「科学」のもつ一側面であり、とても大事なところかと思えます。このことは、科学に限らず、芸術や表現、人間という生きもの的一生(人生)、即ち生活者としての日々の営み(文化)の源泉とも言えるかと思えます。

そんな思いを重ねながら、今回のG.S.では、研究館で7月開催に向けて取り組んでいる企画展「食

草園が誘う昆虫と植物のたまし合い」展制作のエピソードなどからお話をさせて頂こうと思っています。

先日、『ファーブル昆虫記』の翻訳者として知られ、無類の〈虫好き〉を自認する仏学者の奥本大三郎先生を、永田館長と共に訪ねお話を伺いました。「虫の声にぞおどろかれぬる」と歌に読む日本文化に対し、“BUG”は悪魔の作った生きものと見做す昔の西欧文化、文学作品に表れる違いから読み解く面白い話題が満載の対談になりました。そんな話題にも触れたいと思います。

研究館で進めている研究の一つで、アゲハチョウに注目し、チョウが食草を見分けるしくみを探っています。ナミアゲハはミカンやサンショウといったミカン科の植物の葉を、アオスジアゲハは樟脳(防虫剤)の原料であるクスノキの葉を、ジャコウアゲハはウマノスズクサ(アリストロキア酸という毒物質を含む)を利用しています。チョウ(成虫)は花蜜を吸うので、葉っぱを食べるのはお母さんが産んだ卵から生まれてくる幼虫(いも虫「腹ペコ青虫！」)です。お母さんは、自分は食べないのに、産まれてくる子の食べる植物を知っていて、自然界に数ある葉っぱの中から正確に、子の食べることのできる葉を識別し、そこへ卵を産みつけるのです！チョウは種ごとに、そうやって利用する植物が違う、つまり「棲み分け」をしているのです。チョウは、人間よりもSDGsの意識が高いのかもしれない(笑)。でもそれは、5億年の(地球上の生命進化 38億年の歴史の中では最近の5億年！)陸上生態系の中で、発生(個体の一生)をくり返す進化の中で自ずと生み出されたシステムなのです。生きものとはそのような存在なのです。そして、ホモ・サピエンスもそうであるはずで。

研究館は4階建の建物です。その屋上に、チョウの利用する植物を植えた小さな庭があります。実は、私は初代庭師でした。先程、述べた館の研究を来館者と共有するための生態展示で、設置から、かれこれ20年になります。鉄筋コンクリート建築のてっぺんに植物があることを、どのようにしてか、蝶々たちはそれを知り、ここを訪れます。ハチヤクモ、アブラムシやダンゴムシも棲んでいます。研究館の屋上に設えた、たかだか12平方メートルの食草園ですが、ここでの昆虫と植物のドラマは、地域の自然を、さらに、ユーラシア大陸の極東で、細長く縦に伸びた小さな島国に固有の自然を、物語る窓でもあります。6/12(土)は、スライドや動画を交えて、そんなお話を予定しています。よろしかったらお越しください。

P.S.

言及を忘れていました！タイトルにある『胡蝶』は、G.S.の度に小鼓の実演させていただいておりますが、能の世界と科学の世界を自らの身体の中で重ねる試みとして、今、ちょうど取り組んでいる課題曲です。素人芸ですが、よろしければこれもやらせてください。

「生命誌」の基本は科学ですが、私は「生命誌」とは、語りの芸能の一種だと思っています。能楽は『古事記』以来の日本を語り継ぐ物語芸能ですが、生命誌には、38億年の物語を語り継ぐ芸能という一面があり、実は、そこにレゾナードルがあると思っています(いわゆる科学館とは違うのです)。生命誌の「誌」は、歴史であり、物語でもあると思っています。

ナミアゲハ（左）とキアゲハ（右）



ドローンで撮影した「食草園」



7月の Global Session

期日: 7月25日(日) 場所: ガレリア3階 オンラインと対面と両方で

ゲスト: 濱田雅子さん(20回目)

『20世紀アメリカの女性デザイナーの知られざる真実ーティナ・リーサの作品に見るフェアトレードと持続可能性ー』

フランスではなく、アメリカがファッション界に伸び出してきた真実を解き明かす講座